改訂新版

中世歌壇史の研究

室町後期

井上宗雄

明治書院

井上宗雄（いのうえ むねお）

大正15年，東京生まれ。昭和26年，早稲田大学第一文学部卒業。現在，立教大学文学部教授。文学博士。専攻は中古中世和歌史。主著，『中世歌壇史の研究室町前期』（風間書房，昭36），『中世歌壇史の研究南北朝期』（明治書院・昭40），『中世歌壇史の研究室町後期』（明治書院・昭47），『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院・昭53），『増鏡全訳注』（全3巻・講談社・昭54～58），『中世歌壇史の研究室町前期〔改訂新版〕』（風間書房・昭59），『中世歌壇史の研究南北朝期〔改訂新版〕』（明治書院・昭62）。

© 1987 Muneo Inoue

中世歌壇史の研究　室町後期　改訂新版

昭和四十七年十二月十五日　初版発行
昭和六十二年十二月三十日　改訂新版発行

定価 9,800円

著者　井上宗雄

発行者　株式会社　明治書院　代表　三樹彰

印刷者　大日本法令印刷株式会社　代表　田中忠

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一ノ一六
電話東京（二九二）三七四一（代）
振替口座東京三―四九九一番

ISBN 4-625-41080-0

星共社　製本

目次

序章……一
第一章　延徳・明応期の歌壇……九
1　宮廷歌壇……九
2　飛鳥井家の動向――宋世と雅俊と……一三
3　両冷泉家の動向……二三
4　三条西実隆……二七
5　公家歌人……三三
6　洛中・洛外の僧侶歌人……四八
7　法体の専門歌人――宗祇流・常光院流・招月庵流……五七
8　洛中・洛外の武家歌壇……八七
9　地方歌壇……九八

第二章　文亀・永正期の歌壇……一一
1　宮廷歌壇……一一
2　両冷泉家の動向……一一七
3　飛鳥井家の動向……一三一
4　三条西実隆　付　公条……一三八
5　公家歌人……一四五
6　洛中・洛外の武家歌壇……一六三
7　僧侶の歌人と常光院流と　付　狂歌・教訓歌等の盛行……一七四
8　祇門の人々……一九二
9　地方歌壇……二〇八
第三章　大永・享禄期の歌壇……二二九
1　宮廷歌壇……二三〇
2　三条西家――実隆・公条……二三六
3　両冷泉家の動向……二四〇
4　飛鳥井家の動向……二四六
5　公家歌人……二四九
6　洛中・洛外の武家歌壇……二六二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7　常光院流と僧侶歌人と……二六九
8　連歌師の動向……二七九
9　地方歌壇……三〇四

第四章　天文・弘治期の歌壇……三二七
1　宮廷歌壇……三二八
2　三条西家――実隆・公条・実澄……三三〇
3　両冷泉家の動向……三四七
4　飛鳥井家の動向……三五三
5　公家歌人……三五六
6　常光院流と僧侶歌人と……三七六
7　洛中・洛外の武家歌壇……三八四
8　連歌師の動向……三八九
9　地方歌壇（一）　畿内・東国……四〇二
10　地方歌壇（二）　西国　付　歌書の書写・教訓歌など……四四三

第五章　永禄期の歌壇……四五九
1　宮廷歌壇……四六〇

2 三条西公条……四六三
3 飛鳥井家の動向……四六八
4 両冷泉家の動向……四七二
5 公家歌人……四七五
6 洛中・洛外の僧侶・連歌師・武家歌人……四八五
7 地方歌壇……四九五

第六章 元亀・天正前期の歌壇——信長時代の歌壇……五一五
1 宮廷歌壇……五一六
2 三条西実枝……五二三
3 飛鳥井家の動向……五三九
4 両冷泉家の動向……五四五
5 洛中・洛外の公家・僧侶・武家歌人……五五二
6 地方歌壇(一) 畿内・東国……五六九
7 地方歌壇(二) 西国……五八四

第七章 天正後期・文禄・慶長初期の歌壇——主として秀吉時代の歌壇……五九七
1 宮廷・仙洞の歌壇……五九七

2　摂家の歌人たち……六〇二
3　飛鳥井家の動向……六一三
4　細川幽斎と也足軒中院通勝（一）……六一七
5　三条西実条（一）――慶長六年まで……六三一
6　冷泉家の動向（一）……六三七
7　洛中・洛外の歌人たち……六四一
8　秀吉の歌壇（一）……六五四
9　秀次の歌壇と秀吉の歌壇（二）……六六六
10　地方歌壇……六七五
11　慶長期の堂上歌壇……六九〇
12　幽斎・也足（二）とその門流……六九四
13　三条西実条（二）……七〇六
14　冷泉家の動向（二）と京都歌壇の趨勢……七一三
終章……七一九
付録　室町後期歌書伝本書目稿　付　狂歌・教訓歌書目稿……七二七
索引……七七三

補注篇……八一一
付録　『南北朝期』『室町前期』〔改訂新版〕補注……八九六
補注篇　索引……九〇四
あとがき……九二〇

序章

鎌倉時代の和歌史は、歌壇の動向という点から見ると、承久の乱（一二二一）に至る初期、皇統の分立・歌道家の分裂が顕在化した弘安十年（一二八七）頃に至る中期、それ以後、京極家が冷泉家と連携して持明院統に、二条家が大覚寺統に結合して対抗し合った末期、と三区分されるであろう。また南北朝時代の歌壇は、観応の擾乱（一三五〇）までの初期、応安末（一三七五）頃までの中期、それ以後の末期と三区分されると思われる。以上は、拙著『中世歌壇史の研究南北朝期』（明治書院、以下『南北朝期』と略す）で述べた所であるが、現在別に修正を要するとは思っていない。次に室町時代の歌壇は、大きく前後二期に分けられるかと思うが、その境は応仁・文明期であろう。而して応仁・文明期を前期の末とするか、後期の初とするか、両様の見方が可能であろうが、拙著『中世歌壇史の研究室町前期』（風間書房、以下『室町前期』と略す）では一応前期の末として把えておいた。

鎌倉時代・南北朝時代・室町時代という時代区分や呼称は、一般的な、或は教科書的なもので、所謂文学史乃至は和歌史の叙述として適切か否かは勿論問題だが、本書が和歌史の基礎的な諸問題の解明・叙述を主たる目的とした所からその区切りに従ったまでで、中世歌壇史を全面的に把える場合には次の如き区分も可能であろう。

和歌が文芸としての性格を深めつつ、同時に社会的地位を高めて来たのは、十一世紀から十二世紀にかけての時期であった（院政開始の前後。和歌の変質＝中世和歌の出発）。和歌は「すき」の歌人達によって創られ、そこから専門歌人

群、歌道家が生れ、それらを中心として歌壇が明確な姿を見せてくる。そして彼らによって創られた和歌が顕現される最高の場は宮廷や仙洞となって行った。歌壇は朝廷、就中、院の権力と深い関りを持ち、このような時期が承久の乱まで続くと見られる（これを中世歌壇史の第一期として把える事が出来よう）。続いて鎌倉中期から南北朝初期に至る歌壇は、主として京都における王朝的権力と結合した歌道流派が対抗し、京極派和歌が生み出された時期である。観応の擾乱によって京極派とその歌風とがほぼ壊滅し、この後、京都の公家貴族は殆ど新しい歌風乃至は歌論を創造する事がなかった（これを中世歌壇史の第二期として把える事ができよう。而して公家貴族の集団が何らかの新しい和歌を創造しえたという点に観点をおく場合、南朝歌壇は――観応の擾乱以後に属するが――第二期に含められよう）。

南北朝中期以後室町前期に至る歌壇は、公家的色彩を持つ武家政権足利幕府との関りを深めた時期である。幕府は技術的指導者としての宗匠を任免し、幕府から忌避された歌人は歌壇的に沈淪するのが常であった。一方公家歌人の力量を凌駕する人々も、特に法体歌人層から輩出する。頓阿・了俊・耕雲・堯孝・正徹・心敬、下って宗祇らがその代表である（了俊・耕雲は元来は上級の武家・公家であったが、歌人として活躍するのは野に下り、法体となってからである）。心敬の「ひとりごと」にみえるが如く、歌道家の歌会は勿論、公武家、専門歌人の草庵での歌会が百花繚乱として継起し、「きら〳〵しき会席」は数えるに暇ない程であった。これら歌会の盛行が朝廷や幕府歌会の地位を相対的に低下せしめた事は争いえない事実であろう。が、繰返して述べれば宮廷や幕府の歌会はその権威を決して喪失した訳ではない。特に将軍権力は一貫して歌壇に大きな影響力を与えていたのである（この期を中世歌壇史の第三期として把えられよう）。何といっても重要歌人の多くが貴族や上級武士や高級僧侶だったからである。

なお応仁・文明期を、私は一応、室町前期の末（即ち第三期の下限）に含めると上に述べたが、それは京都歌壇が将軍義尚（長享三＝延徳元一四八九年没）を中心として絢爛たる大歌合や大規模なる打聞撰集を行い、幕府と公家とが一体にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

って、そのリードによる様々な歌壇的催しが最後の光芒を放った時期だからである。一方『室町前期』で、私はこの時期に初めて地方歌壇の動向を叙したが、そこで考察したように、守護代その他在地の武士の実力や地位の向上、そして大乱後の、守護大名や被官らの帰国によって地方歌壇が相次いで成立し、和歌の階層的・地域的拡散が顕在化したという点で、新しい傾向を示してくる時期である。即ち過渡期的様相は極めて顕著で、これを室町後期（戦国期）の初めとみる考え方の存する事も故なしとはしない。

本書は以上の時期を承けて、延徳元年（一四八九）以後、慶長初年（一六〇〇前後）に至る百年余りの歌壇の流れ（いわば中世歌壇史の第四期に当る大部分）を七章に分って叙述する。

補　記

中世和歌史乃至は歌壇史の時期区分については様々な説がある。私見も「中世和歌史の構想」（文学・語学、昭四一6）・「室町後期の和歌」（国語と国文学、昭四四4）に略説した事がある。而して最近、福田秀一『中世和歌史の研究』（昭四七）が巧みに諸説をまとめ、かつ氏自身の見解を記しているので参照されたい（氏は和歌史の区分としては新古今時代・鎌倉南北朝時代・室町時代・安土桃山時代と四分する）。

二拙著刊行後、鎌倉末期から室町前期にかけての和歌については、多くの研究が為され、資料も刊行された。その多くは上掲福田著に掲出され、また研究史的展望も行われているのであらためて再説はしないが、私個人に即して若干記したい事があるので、それについてのみ述べておきたい。

資料の翻刻についていうと、鎌倉末期・南北朝時代の和歌作品は未刊のものも勿論未だ多いが（懐帋巻、一宮百首、

嘉元・文保・延文百首、学書の類）、かなり進んで来ている。碧沖洞叢書『未刊和歌資料集』（簗瀬一雄・小内一明・文弥和子・和田英道・井上）、未刊国文資料『頓阿法師詠と研究』（久保田淳・樋口芳麻呂・和田茂樹・井上）、『中世歌合集と研究』（上は福田・井上、下は荒木・国枝・福田・井上）にかなり多く収めた。なお尊円の卅首・五十首は森縣「尊円法親王御詠草三種」（書陵部紀要十九）に、為定七夕七十首が稲田利徳氏によって『中世文芸』38に翻刻された。上記の内、『未刊和謌資料集二』の「春日社頭公武和歌」は内閣本に依ったが、（愛知県の穂久邇文庫本を）近藤喜博氏が芸林（昭四〇4）に翻刻した事を後に知った。『中世歌合集と研究』下冊に収めた「仙洞謌合」は、『南北朝期』（四一〇頁）で、歌書綜覧の解説に従って述べたが、写真版によってであるが、全貌を知る事が出来た結果、応安三、四年頃のものである事を知った。これによると崇光院仙洞のこの頃の歌会は為秀を指導者としていたらしい。この仙洞の歌人グループが、後の伏見殿歌会の源流を為すのであるが、応永初年に撰ばれた伏見殿撰集菊葉集に京極歌風の伝統があるという伊藤敬氏の指摘（「菊葉和歌集考」国語国文研究44）も、この歌合を中間に置いてみると、その必然性がよく分るのである。なお伊藤「菊葉和歌集考補遺」（藤女子大国文学雑誌11）も注目すべき見解を多く含む。

『南北朝期』（六二頁）で触れた「至徳百首和歌」は吉永登・東郷富規子「隠岐高田明神百首和歌について」に解説・翻刻のある事（関西大学文学論集、昭三1）を漏したのは迂闊であった。

室町前期の翻刻作業は遅々たるものがある。上記の下冊に「武家歌合」（正徹・心敬ら歌合）等重要なものは収めたが、外に、稲田利徳「正徹の和歌の新資料、寄花述懐和歌について」（中世文芸42）・「永享九年正徹詠草」（国文学攷58、昭四七・2）、稲田浩子「慕風愚吟集」（昭四五、私家版）、三浦三夫「慰草（松平文庫本）」（昭四四3、私家版）等が重要なものであろう。なお注釈の成立は室町前期と思われる「六花集注」を三村晃功・稲田利徳・島津忠夫氏と近く古典文庫から刊行する予定である。

以下、歌人伝・歌壇史的研究論文を中心に若干述べると、京極派和歌の研究深化は著しい。浜口博章「玉葉和歌集を構成する人々」（甲南大学文学会論集39）、鹿目俊彦「藤原定成について」（和歌文学研究27及び日語文34）、岩佐美代子「風雅集女流歌人伝記考」（国語国文、昭四六6。岩佐氏には注意されるものが他に多いが割愛させていただく）、大坪利絹「京極歌風の問題点」（大阪大学語文29、昭四五5）等、枚挙に暇ない。

偽書関係については三輪正胤氏によって家隆仮託書の研究が進められ（大阪府立大学紀要一六・一九）、偽書と関係深い古今集の注釈書が片桐洋一氏によって解題・翻刻され始めた（『中世古今集注釈書解題一』昭四六）。田中裕『中世文学論研究』、「桐火桶模索」（大阪大学語文29）も注意される事、言を俟たないであろう。なお二条派に関する研究は少ない。小原幹雄「松平文庫本為定集の考察」（島根大学文理学部紀要1）は該本が多くの歌人の歌を集めたものである事を調査一覧したものであるが、同様に岩佐正「足利尊氏の和歌についての研究」（国文学攷58、昭四七2）も、等持院贈左府御集は実は為尹千首の歌が大部分で、耕雲・栄雅・為氏らの歌若干を含む集である事を明らかにしたものである。また慶運法印集と慶運百首について詳しく考察した稲田氏の論が中世文芸46にある。

耕雲については福田前掲著に詳しい研究があり、なお石原清志「耕雲明魏と中国詩論」（龍谷大学論集三八八）がある。室町初期では下房俊一「伏見宮貞成」（国語国文、昭三三11）、稲田利徳「松山短冊帖」（ことひら23。応永廿一年四月細川道観勧進頓証寺法楽千首の考察）、「新続古今集の第一次奏覧本について」（国語国文、昭四六10）がある。なお稲田氏の正徹研究は極めて多い（草根集の諸本研究が広島大学文学部紀要二八―一・二九―一所載。「畠山匠作亭詩歌」和歌文学研究二三・「正徹と心敬」国語と国文学昭三三8・「正徹と了俊」国文学攷昭四四9等）。草根集の本文研究は田中新一氏によっても進められている（愛知教育大学研究報告20・21、国語国文学報21・23）。同氏には「正徹と斎藤利永」（国語国文学報24）もある。外に小泉和「正徹と五山文学ノート」（フェリス女学院大学国文学会誌3）、石原氏の論（文学史研究11・12）等があり、心敬の研究も盛んであり

（野毛孝彦「心敬年譜」明治大学『文芸研究』16、稲田「心敬の和歌表現の特性」中世文芸45、横山重『心敬作品集』。歌論・連歌論研究はもとより多い）、研究史展望のみで恐らく一章がたてられるであろう。

以上の外、室町前期で注意すべきものには米原正義「能登畠山氏の文芸（一）」（国学院雑誌昭四11）、吉川隆美「朝山梵燈庵の出自について」（松江高専研究紀要5）等がある。なお個人の願いで恐縮だが、『室町前期』で紹介した異本慕景集を『未刊和謌資料集一二』（碧冲洞叢書九九）に翻刻した。道灌の真作か否かの検討を請いたい。

＊　＊

本書も前二著と同じく資料に即して述べる事を原則とし、典拠はその場でいちいち記すようにした（但し事蹟資料は夥しいので切捨てたものも多い）。なお書名では、大日本歌書綜覧→歌書綜覧、日本歌学大系→歌学大系、群書類従→類従、弘文荘待価古書目→弘文荘書目の様に略称を用いたものも多い。記録類は原則として実名による呼称を用い、公・卿の字は省いた（例えば、後法興院記→政家記、実隆公記→実隆記）。また多くの章に亙って恩恵を蒙る事の多かった論攷は左記の如くである（本文では所載誌を略した）。

奥田勲「連歌作品年表稿」（東京大学教養学部人文科学科紀要第32輯、国文学・漢文学X、昭三九4）
米原正義「大内氏の文芸」（国学院雑誌、昭三7）
同「越前朝倉氏の文芸」（同、昭三七10、11）
同「能登畠山氏の文芸」（同、昭四〇1、3）
同「中世武士と文芸――今川氏の場合――」（同、昭三七5）
同「若狭武田氏の文芸」（日本歴史、昭四四10）
伊藤敬「三条西実隆と和歌――その二　雪玉集のこと――」（国語国文研究30、昭四〇3）

同「雪玉集定数歌考」（苫小牧高専紀要1、昭四一3）
同・遠田晤良「公条家集について　公条家集（翻刻）」（同2、昭四三3）
伊藤「三光院家集（広本）解題　付　称名院家集について補遺」（同3、昭四三3）
同・遠田晤良「光台集―三光院殿家集―翻刻」（同3）
伊藤「室町後期歌書誌＝実隆・基綱・済継・統秋・宗祇・道堅＝」（同4、昭四四3）
同「三光院実枝評伝」（国語国文研究39、昭四三2）
奥田勲「紹巴年譜稿」（一は宇都宮大学教育学部紀要17、昭四三12、二は同18、昭四三12、三は同19、昭四四12）

なお或る章に頻出する論文名等は、その初出に所載誌名を記し、あとは略した場合もある。また著名な特殊文庫は図書館名を省き、或は通行の名称による事の多かった事をお断りしておきたい（伊達文庫宮城県図書館・狩野文庫東北大・松平文庫島原公民館・北岡文庫正しくは永青文庫・祐徳中川文庫寄托等の割注の部分は省いた）。「図書館」という字を略した場合も多い（大阪府立大阪府立図書館）。

廷臣や武士の姓は、紙幅の増大を恐れて原則として省略した。索引によって知られたい。若干の例外を除いて、俗人は入道しても俗名で記した。

記録類や家集類の詞書にみえる和歌事蹟は余りにも多いので、全てを掲げる事は不可能であるが、作品として現存するものは何処かに位置づけて収めたつもりである。〔補注〕

〔改訂新版〕にあたって

初版刊行以後十五年を経たので、主要な新資料・研究を追加した（『南北朝期』『室町前期』の補訂も若干加えた）。ごく短く補筆しうるものは、本文に〔　〕に入れて示した。長文になる場合は、本文の段落部分に〔補注〕と記し、後ろの

〔補注篇〕の中に本文の頁順に列記した(但し序章・終章には原則として改訂を加えなかった)。また『室町前期〔改訂新版〕』に掲出した参考文献と重複するものには省いたものがある。なお初版本文の誤植はできるだけ訂した。

(昭和六十二年八月)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com